

第一次世界大戦と「独探」

——『東京朝日新聞』による粗描——

諸 橋 英 一

はじめに

一、『東朝』における「独探」報道の全体像

二、日本と海外における独探に関する『東朝』報道の整理
おわりに

はじめに

「独探」という言葉が存在する。これは独逸(ドイツ)の軍事探偵(スパイ)の略語であり、第一次世界大戦期に頻繁に使われた。ドイツ人に限らず、ドイツから金銭や何らかの報酬・見返りを得る目的で独探となる他人・日本人も含まれる。ドイツのスパイについては、大戦に参戦した欧米各国でスパイ・フィーバー(Spy Fever)という現象が発生していたことが知られている。⁽¹⁾戦争という一大事件に際して興奮し或いは不安にかられ、ドイツのスパイが国内のあらゆるところに潜み、身近なところで活動しているのではないかと考えた国民が

スパイに関する「情報」を収集し、口伝やマスメディア・当局への投書を通じて拡散した現象のことである。マスメディアや当局に集まったスパイの情報は殆ど誤りだったそうだが、戦時や非常事態における民衆の心理と動態についての興味深い事例となっている。日本においては日露戦争の際にロシアのスパイを指す「露探」が話題となり恐れられたことが知られており、スパイ・フィーバーに近い状態だったかもしれない。では第一次大戦に参戦した日本ではスパイ・フィーバーは無かったのだろうか。あるいはスパイ・フィーバーほどではなくとも、ドイツのスパイ⇨独探に対する警戒感は無かったのだろうか。

独探に関する研究は少ない。先行研究については、『神戸新聞』（以下『神戸』）における独探報道を検討した別稿にて詳しく述べたので、ここでは簡単にまとめるにとどめる。まず奥武則の露探に関する研究のなかに言及があり、ここでは露探という言葉が含まれていた危機感や切実さは独探にはなかったとされている。⁽²⁾ただしこれは独探を主として扱った研究ではない。一方で谷崎潤一郎の小説「独探」（『新小説』、一九一五年一月）に関する研究は複数存在する。⁽³⁾これはあくまでも文学研究であり、谷崎の西洋観が議論されているようである。実態としての独探やマスメディア上に現れた独探報道といった社会のなかの独探を扱ったものではない。ただし近年、グレゴリー・ケズナジャットが谷崎「独探」の背景説明として『東京朝日新聞』（以下『東朝』）を用い、日本における独探を巡る状況を紹介している。加えて福岡大祐の論文は谷崎「独探」を手掛かりに、政府の情報統制がマスメディアの報道とそれを読む読者の認識をどのように変化させるかを明らかにした。⁽⁴⁾この福岡論文は実際に独壇人に対する国外退去処分とその報道を分析しており、現在のところ唯一の本格的な独探研究といえる。ただし、この福岡論文では国外退去処分、それも一九一五年三月一日の第三次追放までだけが対象となっている。国外退去はこれ以降も発生するし、退去以外の独探関係記事も扱われていない。つまり、大戦中の日本における独探の実態、政府の対独探政策、マスメディアの独探報道と国民意識、そのいずれもほぼ未解明となっている。

したがって本稿では新聞報道における独探報道を整理することから始めたい。新聞と言っても各紙特徴があり、また首都東京と各地方でも異なるだろう。筆者は本稿とは別に『神戸新聞』における独探報道をまとめた⁽⁵⁾。国際港と外国人元居留地を抱えることから住民の身近に外国人が多く、それだけに外国人独探に対して関心が高く、地元紙にもそれが現れやすいのではないかと考えたためである。つまり報道量の多いであろう地方紙のサンプルとして『神戸』を選択した。次の事例として本稿では政治外交の中心地である東京の新聞として『東朝』を扱う。調査期間は一九一四年（大正三年）八月から一九一八年（大正七年）一月までとした。つまり日本が参戦した月から、大戦が休戦した月までということである。別稿にて扱っている『神戸』と同様、本来ならばこの期間の『東朝』紙面を網羅的に調査すべきところだが、諸事情により本稿では「朝日新聞クロスサーチ」をキーワード「独探」「塊探」⁽⁶⁾によって検索した結果を用いた。したがって暫定的な結果である。ただし検索結果の二九〇件は『神戸』の実測値である二一六件と比べても大きい数字であり、検索から漏れている記事がこれよりも著しく（例えば数百件）多いというようなことも考えにくい。またタイトルに「独探」等のワードが用いられておらず、本文中にのみ使われている記事も検索は拾っている。これらの理由によりキーワード検索による結果ではあるが、大まかな傾向を掴むうえで利用は可能であると判断した。キーワード検索から漏れた記事は存在するはずだが、その脱漏は対象期間を通じて偏りなく生じているという仮定で以下の論は進めている。

一、『東朝』における「独探」報道の全体像

1 独探報道の数的推移

表1はタイトルや記事中に「独探」、「塊探」「独塊探」のワードを含む記事の数を示したものである。総件数

独探	9月	10月	11月	12月	合計	月あたり平均数
1914年	9	11	11	2	36	7.2
1915年	1	2	6	10	43	3.58333..
1916年	3	0	3	1	40	3.333..
1917年	17	6	8	11	114	9.5
1918年	4	8	0	-	57	5.18181818..
					290	

二九〇件（うち獨探二、獨塊探四件）で、大戦が勃発した一九一四年の三六件から一九一五年の四三件へと増加し、一六年の四〇件と横ばいを示し、一九一七年には一一四件と激増したのち、一九一八年に五七件と大幅な減少を見せている。一九一四年と一九一八年は調査に含まれない月が存在するため、各年の月当たり平均件数で比較すると、一九一四年の七・二件から一九一五年の三・五八三件、一九一六年の三・三件と減少したのち一九一七年に九・五件と激増したのち、一九一八年に五・二八へと減少する。つまり一九一四年に次点の高さを記録したあと二年間は減少、停滞したのち一九一七年に最高値をつけ、翌年には落ち着くといった増減を示している。また参戦月の八月を起点に翌七月までを一年間とした場合（表2）、第一年目の六〇件から二年目の五〇、三年目の六四、四年目の一〇二件となる。つまり全体的に増減がなだらかにはなるが、初年度にやや高い値を示したのち、いったん落ち着き、戦争終盤にかけて上昇したということになる。以下の文章で第一年、第二年のように書いた場合は全てここでの使い方と同じである。

これら数的な面で『神戸』と比較すると、全体的な推移は類似しているといえる。ただし、第一に『神戸』では一九一六年に大きく関係記事数が減ったのに対し、『東朝』では減ってはいるものの、一九一五年との差は三件とほぼ誤差の範囲であることと、第二に『東朝』では一九一七年の増加が著しいことが目立った違いとなっている。一九一四年、あるいは第一年目の平均件数を『神

表1 『東京朝日新聞』における独探関係記事数

独探	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
1914年	-	-	-	-	-	-	-	3
1915年	3	6	4	8	0	1	2	0
1916年	1	10	3	8	6	3	0	2
1917年	3	6	8	7	7	1	23	17
1918年	9	13	4	7	2	3	5	2

表2

	件数	月あたり平均件数
1年目：1914/8～1915/7	60	5
2年目：1915/8～1916/7	50	4.1666..
3年目：1916/8～1917/7	64	5.33..
4年目：1917/8～1918/7	102	8.5

『戸』ではその後超えることはなかったのに対し、『東朝』では一九一七年および第三・四年目が上回っている。これは『神戸』が地元で発生した独探事件について特集を組むなどして一九一四、一五年の記事数が増加しているのに対して、『東朝』にはそうした記事がみられないこと、そして逆に『東朝』では海外の独探事件に関する報道が多く、それが一九一六年の記事数の落ち込みを防ぐとともに大戦の情勢が大きく動いた一九一七年に件数が激増する要因となったこと、これらが『東朝』と『神戸』の記事数推移の違いとなって表れている。両紙の新聞としての性格の違いが反映されたともいえるだろう。

全く独探に関する記事が無かったのは五カ月で、一九一五年と一六年に二カ月ずつと、休戦協定の結ばれた一九一八年一月である。したがって『東朝』読者は大戦中にコンスタントに独探報道に触れ続けたといえ、その意識には「独探」がある程度定着したのではないだろうか。

2 どのタイミングで独探記事が増えたのか

表を一瞥するとまず一九一四年九月から十一月の期間に独探報道の件数が増えていることがわかる。三カ月で三一件と全期間でも僅差で三番目である。日本は八月二三日にドイツに対して宣戦を布告して参戦し、青島要塞を巡っての軍事行動が一月七日のドイツ軍降伏まで継続する。独探記事がこの時期に多いのは、日本が参加する実際の戦闘が発生し、関心も高かったためと考えられる。この期間には日本軍の動静を監視し、情報をドイツ軍に伝える「独探の支那人」に関する記事が複数確認できる。長崎から出征した山田良水少将率いる先発隊が龍口に上陸したのが九月二日であるが、八月三十一日に独探支那人一名が龍口から芝罘に護送され取り調べを受けているという記事が九月一日に掲載されている。⁽⁷⁾ 上陸に先立って現地では不審な現地人の取り締まりが強化されていたのかもしれない。この記事を皮切りに、この九〜十一月の期間に独探支那人に関する記事は八件確認できる(うち一件は「我が軍に捕はれし独探の支那人」と題された写真⁽⁸⁾。独探支那人により日本軍は「多大の困難を感じ」ており、彼らは無線電信を使い日本軍の所在を独軍に通報し、ある時は苦力に紛れ、ある時はその辺の小屋に潜んで監視を行い、鏡を光らせて信号を送ったり、幹部の所在を発見すると民家を焼いて目印として砲撃の合図とし、あるいは色のついた狼煙をあげて夜間でもそれを目印に独軍が砲撃してくる、といった具合でその活動が紹介された。同時期の『神戸』には独探支那人に関する記事が一二件あり、『東朝』はこれよりは少ない。

独探支那人の記事に限らず、この三カ月間の独探記事数が『神戸』は四一件あり、また同紙においてこれは大戦中最も多い期間だったのに対して、『東朝』ではそうならない。この違いは両紙に於ける地元ネタの多寡が影響している。『神戸』は外国人元居留地や国際港を媒介に神戸市とその周辺に存在・往来する外国人に独探の嫌疑をかける記事が比較的多くみられ、別稿で詳しく論じたように十一月には外国人元居留地で営業しているニッケル・ライオンズ商会 (NICKEL & LYONS) と専務取締役クリスチャン・ホルスタイン (Christian Holstein)

をめぐる独探疑惑がスキャンダラスに報じられる。これに対して『東朝』ではこの三カ月間で明確に地元ネタと
言える記事は麹町にあるドイツ系商館に勤めていた予備役の砲兵大尉に嫌疑をかける記事しかない。⁽¹¹⁾ほかに東
京から逗子に向かった不審な外国人に関する記事が二件あるのみである。⁽¹²⁾開戦初期に、身近に存在する外国人の
記事で「独探」の印象を植え付けられた可能性のある『神戸』読者に比べて、『東朝』読者あるいは東京市民に
は独探は実感を伴わない遠くの存在だった可能性は高い。

次に、最も高い値を示したのは一九一七年七月九月である。これは米露の独探記事が激増したためである。後
述するようにアメリカ参戦とロシア革命は両国における独探についての記事を激増させる切っ掛けであった。こ
の二つの出来事が重なったため最高値となった。また次点の一九一七年一二月から翌年二月は引き続きロシアの
独探記事に加え、フランスの政治絡みの独探事件が大きく扱われたことが大きい。一九一七年末から一八年三月
の期間にはロシアが敗退し、それに伴い日本の出兵可能性が著しく高まり、第四〇議会では軍需工業動員法や戦
時利得税などの戦時政策が導入されている。青島戦や南洋諸島占領の終結以来遠のいていた火の粉が急速に身近
に飛んできたわけである。そうした事情を受けてロシアにおける独探の活動に対して関心が高まったと言えよう。
三月以降もシベリア出兵や、独探の扇動扱いされても不思議のない米騒動があるため、独探報道が増加するのが
自然と考えられるが、実際はそうなっていない。これは三月二三日に内務省から出された通牒の影響と思われる。
この通牒は「時局の關係上頗る重要にして利害に関する所極めて大」であるため「今後国内における独探被疑者
の行動に関する記事は時局中之を安寧秩序を紊すものと認め発売頒布禁止の処分を為す」ことを定めたものであ
る。⁽¹³⁾この通牒も政府レベルでは戦時意識が高まっていたことを示しているといえよう。

表 3 各国関係の独探記事数

独探	日本	フランス	イギリス	アメリカ	ロシア
1914 年	11	3	4	1	3
1915 年	8	0	10	13	8
1916 年	8	1	7	12	2
1917 年	5	11	4	33	37
1918 年	2	13	4	8	15
合計	34	28	29	67	65

独探	日本	フランス	イギリス	アメリカ	ロシア
1 年目 : 1914/8 ~ 1915/7	15	3	12	3	10
2 年目 : 1915/8 ~ 1916/7	10	0	9	22	2
3 年目 : 1916/8 ~ 1917/7	7	1	1	26	17
4 年目 : 1917/8 ~ 1918/7	2	24	5	15	32

二、日本と海外における独探に関する『東朝』報道の整理

1 日本における独探に関する報道について

以下では日本と欧米各国に関する独探（塙探・独塙探含む）の記事の数的推移と内容を整理していく。まず日本の独探に関する記事は三四件ほど確認できる。表3のように、これは後述する英・仏よりは五件前後多く、米・露の半分ほどの規模である。一九一四年の一件が最大で、以後は八、八、五、二と漸減していく。特に一九一七年の五件は全て第三九議会で尾崎幸雄が後藤新平を独探呼びわりのした件に関する記事なので、実質的に独探嫌疑に関する記事はゼロといってもよい。一九一八年の二件も一つは国内における独探の現状を論じる記事だが、⁽¹⁴⁾もう一つが本稿の最後に触れた日本人のドイツ式宴会に関する記事であり独探嫌疑に関するものではない。記事の八割近くが一九一四〜一六年に集中し、それらは「独探かもしれない怪しい外国人・日本人」に関する報道、外国人の国外退去に関する記事、そして国際港に來船した乗客に不審者がいるという記事などに分類でき

る。そうした独探嫌疑外国人は大概が横浜港に出入りし、そうでない場合は下関・門司や神戸といった、同じく港を持つ地域からのニュースというケースが多数である。また国外退去を命じられた外国人は各地から神戸港にしばしばやってくるため、『神戸』では追放発令時と嫌疑者の来神時で二重に報じられる傾向もある。それに対して『東朝』の場合、国外退去にしても基本的に横浜や長崎在住の外国人に関する⁽¹⁵⁾ことなので、地元まで追放者が来る神戸に比して、国外退去外国人が「独探」を身近に感じさせる契機に東京の住民になっていたかは疑わしい。加えて東京を舞台にした独探の記事は前述したドイツ系商館に勤めていた予備役の砲兵大尉のほかには、数件ほどしかない⁽¹⁶⁾。『東朝』の独探記事における地域性の薄さは『神戸』と対照的である。こうした独探嫌疑者の退去記事は一九一六年八月に、また海外から日本の港に來航した船に乗船する嫌疑者を捜査する類の記事は同年九月を最後に見られなくなる⁽¹⁷⁾。

日本国内に関することで「独探」等のワードを含む記事は三〇件を少し超える程度であり、今回検出した記事の総件数二九〇件の十分の一を占める程度ということになる。

2 フランスにおける独探に関する報道について

フランスにおける独探についての記事は二八件確認でき、量の推移をみると一九一四年三件、一九一五年〇件、一九一六年一件、一九一七年一件、一九一八年一三件（第一年三件、第二年〇件、第三年一件、第四年二四件）となっており後半に偏重している。

これらの記事は大別すると三つに分類できる。一つ目が戦地付近やドイツ軍に占領された地域で活動する独探に関するものである。一九一四年の三件と一六年の一件がこれにあたる。ドイツ軍の進攻をパリの目先約五〇kmまで許したフランスは、マルヌ会戦後も自国領土内で戦うことを余儀なくされていた。このため特に戦争初期に

於いては行ったり来たりする戦線から紛れ込んでくる独探の活動が報じられる⁽¹⁸⁾。加えてドイツ軍の占領地域に居住していたドイツ系フランス人の中には積極的に独探として活動する者もあり、逆にドイツ軍によって半ば強制的に独探として活動することを強いられる者もいると報じられている⁽¹⁹⁾。戦争初期には、こうした雑多で真偽不明の独探の事件や風聞が掲載される傾向にあり、これは各国とも共通である。

第二の分類が、内務大臣のマルヴィ (Louis-Jean Malvy) が独探と批判されて辞職に至る件である。マルヴィは急進社会党 (Radical Party、正式には parti républicain radical et radical socialiste) の副党首で、開戦以来内務大臣を務めていた人物である。同党の党首で元首相でもあるカイヨー (Joseph Caillaux) と共に独探と誇られ、最終的に裁判が行われるまでの期間、彼らに関する独探記事は一件ほど確認できる⁽²⁰⁾。簡単に経緯を説明すると一九一六年末に最高司令官に就任したばかりのロバート・ニヴェル (Robert Nivelle) は一九一七年四月にいわゆるニヴェル攻勢を実行したが、仏軍は一五万人の死傷者を出す大失敗に終わり、国民の士気は低下し、軍では兵士の反乱が起こるなどの危機的状況に陥っていた。こうした状況でクレマンソー (Georges Clemenceau) は無政府主義者や社会主義者の平和主義的・敗北主義的なプロパガンダが士気の低下を招いていると考え、「平和主義者のプロパガンダに対する内務大臣ジャン・マルヴィーの弱腰」⁽²¹⁾を七月頃から激しく批判した。これを契機に発生した政局によってマルヴィは辞職し、その後、一月に首相に就任したクレマンソーはそうした「平和主義者」の取り締まりを進め、マルヴィやカイヨーを初めとして多数の者が裁判所へと送られた。マルヴィは一九一八年に背信罪で五年間の追放刑を受け、カイヨーも三年間投獄のうえ追放されている (両名とも一九二四年に大赦を受け政界に復帰している)。マルヴィやカイヨーが実際に独探だったのではなく、クレマンソーによる政敵への攻撃であったと同時に、「敗北主義と闘う政府からスケープゴートとして利用された」⁽²²⁾のであるが、そこまで洞察するには戦況とフランスの政情を理解していなければならず、一般の『東朝』読者には困難だっただろう。独探とい

用語と共にマルヴィについて述べられた最後の記事では、マルヴィが内相の権限で攻撃作戦に関する情報漏洩を防ぐ努力をしたか、敵がフランス政府や軍事当局者に種々の陰謀を企てた際にマルヴィが援助したか、の二点について審問が始まったと報じている。⁽²³⁾ こうした記事は、大物政治家にさえ敵のスパイがいる、あるいは党名の印象から左派は敵のスパイだ、といった印象を薄く読者に残したものと推測される。

第三が通称ボロー・パシヤ (Bolo Pasha)、本名ポール・ボロー (Paul Polo) に関する独探記事である。こちらは独探として処刑されている。大略を述べると、彼はフランス出身で大戦勃発以前から詐欺や重婚を行うなど怪しげな経歴の持ち主でありながら、その重婚により資産を手にし、上流社会とのつながりを持つに至っていたようである。そして一九一四年にはエジプト旅行中にムハンマド・アリー朝最後のエジプト副王 (Khedive) であるアッバース・ヒルミー二世 (Abbas II Helmy) と懇意になり、パシヤの称号を与えられボロー・パシヤと名乗っている。そのヒルミーの財産管理について相談を受ける中で、ドイツ当局と縁ができ、フランスの日刊新聞『Le Journal』を買収して平和主義を鼓吹して早期終戦に向けての世論誘導を行おうとし、その為に多額の費用を一九一六年から一七年にかけてアメリカに滞在して駐米ドイツ大使のベルンストルフ伯爵から受け取ったとされる。「怪しげな人物がドイツの外交官と共謀して新聞を通じて世論操作を行おうとした」という如何にも大衆に受容されやすそうな話である。全体的に『東朝』の本文に関する報道は記事数は多いが断片的である。⁽²⁴⁾ とはいえ、「ジュルナル紙は巴里有数の大新聞紙なるが独探ボローは独逸外務省の旨を承け、密に之が買収を企て以て国内に非戦争熱を鼓吹せんとしたるものなり」との記述もあり、⁽²⁵⁾ ドイツ政府が独探を通じて新聞による世論操作を行おうとしたという印象を読者に残した可能性はある。

マルヴィの件とボローの件が一九一七年以降二四件あるフランスの独探記事のほぼ全てを占め、ほぼ半々となっている。唯一の例外が有名な独探マタ・ハリの銃殺刑が執行されたことを伝える記事である。⁽²⁶⁾ こうした傾向

は『神戸』でもおおむね同じである⁽²⁷⁾。

3 イギリスにおける独探に関する報道について

イギリス関係の独探の記事数はアイルランド、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドにインドを含めると二九個、本国に限定すると一三個ほどである。量の推移は一九一四年四件（うち一件はカナダ）、一九一五年一〇件（うち二件はインド）、一九一六年七件（アイルランド五、カナダ二）、一九一七年四件（イギリス、カナダ、インド、ニュージーランドが一件づつ）、一九一八年四件（イギリス一、インド二、オーストラリア一）となっている。また第一年一二件、第二年九件、第三年一件、第四年五件である。比較的起伏の乏しい推移となっているが、時間が経過すると本国以外の大英国内の独探の記事が多数を占めた。

一九一四、一五年は雑多な独探記事が多数を占める。独塊探数百名が逮捕されたことを伝える記事⁽²⁹⁾やイギリスの軍艦が沈没したのは「独探の所為なり」という噂最も高し⁽³⁰⁾ということ伝える記事、あるいはロンドン学士院幹事シエスタ博士が無線電信をして独探行為をした容疑が全然事実無根と判明したことを伝える記事⁽³¹⁾など、イギリス内の浮足立ったスパイフィーバーの様子を感じさせるものが目立つ。また日本人の英国からの土産話という形の記事にも当地で独探対策が厳しく行われていることが伝えられた⁽³²⁾。

次第にアイルランド、インド、オーストラリアなどの大英帝国の周縁部に於ける独探の分離工作に関する記事が目立つようになってくる。例えばインドについて、一九一五年二月の記事がシンガポールにおけるインド兵の暴動は独探の扇動の結果である可能性を指摘している⁽³⁴⁾。あるいは独立を目指すインドの革命党が独探の援助を受けておりインドの政情がやや不安定になっている⁽³⁵⁾とか、インドの北部辺境では独探がマリ族の暴動を扇動している⁽³⁶⁾など、インドの独探問題は日英の外交に関係する面もありしばしば紙面に登場する⁽³⁷⁾。

アイルランドの反乱扇動については特にロジャー・ケイスメント (Roger Casement) に関する記事が五件ほど一九一六年四、五月に掲載されている。⁽³⁸⁾ ケイスメントは元タルワンダやブラジルの領事・総領事も務めたことのある外交官でナイトの称号も持つ名士である。一九一二年の退官後はアイルランド義勇軍の執行部に入り、大戦が始まるとアメリカとドイツで活動し、一九一六年四月下旬のイースター蜂起にむけてドイツから武器支援の約束を得て、ドイツの潜水艦でアイルランドのケリー州トラリー湾に上陸したところを逮捕され、反逆罪で一九一六年八月三日に処刑された。ちなみに彼が上陸の際に使った小舟は王立アイルランド警察隊にとっては大逆人を捕えた勲章であり、ジョージ五世の目に触れることとなり一九二〇年には帝国戦争博物館に展示された。処刑後もアイルランド情勢の記事にはケイスメントの名前が登場し、「独探」の用語は文中になくともドイツの陰謀に話が及ぶ。⁽³⁹⁾ ドイツが独探を通じて国の内部や連合国間の離間工作を行っているという説の分かりやすい事例がこのケイスメント事件である。『東朝』の社説では、イギリスには南ア、カナダ、インド、アイルランドのように警戒を要する地域があり、またアメリカにおいても排英気分を扇動し、支那においても日英を離間してイギリスを孤立させようというドイツ「得意の陰謀」が行われており、「在支英人諸君に向かつて、独逸の扇動せる愛蘭暴動が、戦時の今日に当たりて、何事を吾人に教ふるかを三思せんことを望まずんばならず」と述べられている。⁽⁴⁰⁾ ここではドイツの陰謀に警戒を促す形を取りつつ、日本の対中政策の正当性を理解するよう求めるところに本音が見え隠れしているといえよう。これら『東朝』におけるイギリスの独探報道の傾向は『神戸』と類似したものであった。

4 アメリカにおける独探に関する報道について

アメリカ関係の独探記事は全部で六七件と英仏より二倍以上多い。量の推移をみると一九一四年一件、一九一

五年一三件、一九一六年一二件、一九一七年三三件、一九一八年八件(第一年三件、第二年二二件、第三年二六件、第四年一五件)となっている。第一年が三件であることから分かるように一九一五年前半までは非常に少なく、また一五・一六・一八年は各一〇件前後なのに対し、一九一七年が極端に多いことがわかる。

一四年から一六年までの二六件中およそ半数近くは船舶や港湾設備に対する独探による破壊工作に関する記事が占める。これは実際に米国内の独探が連合国向けの輸出を阻止しようと頻繁に事件を起こしていた可能性もあるが、それと同時に日本船も破壊工作の対象とされる恐れが実際にあり、日本人にとって当事者意識を持ちやすく関心が高かったと考えられるだろう。そうした事件は開戦からしばらくは通信社や新聞社の現地特派員が送ってきていたが、⁽⁴¹⁾一九一五年末になると日本に帰国した日本船の船長や乗組員の話という形で伝えられ始める。例えばシアトル港では連合軍用の貨物倉庫が独探の予告通り燃やされ、米国内のドイツ系帰化人は「殆ど全部は独探的行為を」している、と二月四日神戸に入港した日本郵船の横浜丸の船長は語っている。⁽⁴²⁾あるいは船員の話として軍需品を積んだ東洋汽船の春洋丸がサンフランシスコで出航当日に爆破されそうになったことが伝えられている。⁽⁴³⁾ 棧橋に係留中の同船の周りを挙動不審な人物が徘徊していたため警官が取り調べたところダイナマイトを所持していたという。通常の外国のニュースとしてよりも、このように日本人の船員から語られる話は読者に独探の存在をリアルに感じさせただろう。こうしたアメリカと日本を含む連合国間を航行する船舶・港湾施設への独探の活動は大戦期間を通して紙面に登場した。これは必ずしも独探が対岸の火事ではなく、日本にも関係のあることとして読者に認識させたとと思われる。アメリカにはドイツ系住民も多数存在するうえ、参戦するまではドイツ人も自由に往来できた。開戦以降アメリカにおける独探事件もそれなりに報じられており、こうした船舶関連記事はその最たるものであった。

加えて駐米ドイツ領事や大使館付武官など公的な立場にあるドイツ人による独探行為も一九一五年後半から紙

面で取り上げられた。例えば前サンフランシスコ駐在オーストリア領事ゴリカル (Joseph Gorikar) が「在米奥国領事館は孰れも独塊探の本部なり」と談話を発表した問題で米当局が調査を開始したと報じられた⁽⁴⁴⁾。また駐米ドイツ大使館付武官のボイド (Karl Boy-Ed) 海軍大佐がアメリカ沿岸のドイツ艦に物資を供給した容疑で裁判にかけられた事件に関しても、ハンブルク汽船会社の役員三名が独探容疑で禁固刑を受けたことなど大掛かりに事件が展開していく様子を複数回にわたって掲載した⁽⁴⁵⁾。こうしたタイプの独探記事はアメリカ参戦後も続く⁽⁴⁶⁾。

一九一七年にアメリカの独探関係記事が激増しているのは米独国交断絶と参戦が原因とみられる。参戦によって生じたアメリカにおけるスパイフィーバーが日本の紙面にも伝播したといえよう。内容は船舶や工場への破壊工作⁽⁴⁷⁾、労働者のサボタージユ扇動⁽⁴⁸⁾、そして米当局が取り締まりを強化⁽⁴⁹⁾していることを伝えるものなどが殆どである。なかには切り傷用の軟膏に病原菌を混ぜて病を流行らせようとした独探をカンザス市で逮捕したなどという荒唐無稽な記事 (UPI通信社発) もあり、アメリカ国内の浮き足だった心理を示す最たる例といえよう⁽⁵⁰⁾。また南部諸州で独探が黒人を扇動しているという記事もあり、これは前述したインドやアイルランドの反乱を独探が扇動したという記事と同種である。そうした独探による反乱扇動がどの程度事実だったかではなく、そうした記事を見て「さもありません」と受容できる読者の心理的土壤の存在、つまり支配民族・マジョリティ人種による抑圧の自覚があったのではないだろうか。そう考えると日支の離間を独探が試みているという記事はあっても、朝鮮人の反乱を独探が扇動しているという記事がこれまでのところないのはなぜだろうか。一考の余地がある。

一九一七年のアメリカの独探記事に話を戻すと、日米親善を独探が妨害しているというタイプの記事が複数存在する。背景として、この時期は対中政策を巡り、日本は南満州の権益の保証を、アメリカは門徒開放・領土保全を互いに求めている。同時にアメリカは参戦によって緊密な日米連携を必要とした一方で、日本もアメリカから重要資源を輸出してもらう必要がある、お互いに関係改善を求めて七月の石井菊次郎のアメリカ派遣、そして

九月からの石井ランシング会谈へとつながっていく。そうした状況においてアメリカの対日世論の動向は気になる問題であっただろう。例えば「全米に排日活動写真▽独探の仕業」(『東朝』、一九一七年三月三日)では、「日本を以て米国の敵なりとし、日本人を以て極悪非道の国民なり」と描く映画が全米で公開されており、これは独探の活動と思われる、共通の敵を前にして米政府は映画業者に対しても日米親善を妨げるようなものは中止させるべきだ、というニューヨーク・ヘラルド紙の論説を紹介している。⁽⁵¹⁾また石井とランシングの会谈にあたっては社説で「石井特使の繰返せる如く、全然独探の所業なるや否やは、多少詮索の余地無きにあらざれども、独探をして幾分にも、日米国交に水を指さしめたるは、畢竟両国の内情に就いて、互いに了解の完からざりし為ならざるを得ず」と、日米間の摩擦の原因が全て独探のせいではなく、そもそも日米が独探につけ入る隙を与えていたことを指摘している。⁽⁵²⁾この社説が指摘するように、不都合なことは独探のせいにされがちであり、これは国を問わない現象である。

5 ロシアにおける独探に関する報道について

アメリカと同規模の独探記事が掲載されているのがロシアであり、全体で六五件確認できる。時系列で量の推移をみると一九一四年三件、一九一五年八件、一九一六年二件、一九一七年三七件、一九一八年一五件(第一年一〇件、第二年二件、第三年一七件、第四年三三件)となっている。アメリカ以上に一九一七年偏重となっており、また第四年が多いことは一七年後半以降に記事が多かったことを示している。これは一九一七年三月にロシア革命が発生して以降、ロシアに対する関心が急激に高まったことを意味する。それ以前には極東ロシアの国際都市ウラジオストクにおける独探⁽⁵³⁾と有名なスホムリノフ陸相の独探嫌疑⁽⁵⁴⁾関連が半数を超える。

一九一七年三月以降、革命により不安定な情勢が発生すると、政治変動は独探と関連付けられるようになる。

革命勃発当初はロシア皇后独探説が『東朝』にも登場する。例えば皇后が独探と共に薬を酒にいでて皇帝に飲ませて昏睡させ、その間に秘密書類や地図を盗み、あるいは偽の命令書を作り戦地に発し、併せてドイツにもそのことを通知していることが発覚したという荒唐無稽な記事がみられる。⁽⁵⁵⁾しかし時間の経過とともに、暴動は独探に民衆や兵士が扇動されたせいだという論調に変化する。⁽⁵⁶⁾革命を起こすときには民衆を焚きつけるために王侯と独探の関係を鼓吹し、臨時政府が成立してからは独探に惑わされるなど民衆を落ち着けるために叫ぶ革命派勢力の情報戦がそのまま独探報導に反映されているといえよう。寄り合い所帯の臨時政府は確固とした統治体制を築くどころか、夏の終わりには政権は崩壊しかかっていた。⁽⁵⁷⁾国内の治安は悪化し、臨時政府に参加しなかったボリシェビキが台頭してくると、今度はそのレーニン派が独探としてクローズアップされるようになる。例えば八月一九日の社説は「レーニン一派の社会党は、今や独探として露国民の排斥する所となり」と紹介している。⁽⁵⁸⁾あるいは勝田主計蔵相が「レーニン一派の如きは既に独探として内外に危険視」されていると演説で述べるように、⁽⁵⁹⁾ボリシェビキを独探とする見方は当時の日本社会でも周知のものであったといえよう。そしてドイツは彼等を操って露独の講和に持ち込もうとしているという観測がなされていた。⁽⁶⁰⁾秋にはロシアから退避してきた日本人からもロシア国内に如何に独探が跋扈しているかが語られる。⁽⁶¹⁾一九一七年末まではこの調子でどちらかといえば臨時政府の目線で「独探」が認定され、それが『東朝』の紙面にも伝わっていることが分かる。臨時政府は基本的には戦争継続を掲げており、連合国にとってもそれで都合がよかったと考えられる。情報戦の側面を感じさせる一方で、レーニンがドイツの手引きで四月にロシアに送り込まれていたことも事実なので、一概にただのプロバガンダというわけでもなかった。

ここまで『東朝』紙面においてはロシアの独探といっても欧露方面が関心を集めていたが、一九一八年に入ると劇的に極東ロシア・シベリア及び滿蒙方面関連のものが中心となる。一九一七年二月一五日にドイツとボリ

シエビキ政府の休戦が成立し、ロシアの戦線離脱によるドイツ勢力の東漸が日本国内において警戒され始めることがその原因と考えられる。一九一八年一月三日にはハルビン特派員発の情報として、イルクーツクに全シベリア諜報局とも称すべき独探本部発見され、独参謀本部の指令を受けて「(一) 日本の行動探諜 (二) 日本に対し出兵の口実を造らしめざる様努力する事 (三) 過激派政府と独逸政府と何等の関係なき様世人をして信ぜしむべく努力する事」などについて、ユダヤ人や在露ドイツ人を使用してシベリア、支那、蒙古に至るまでスパイを活動させている、と報じた。⁽⁶²⁾ イルクーツクはこのあともシベリアにおける独探の本拠地とされ、⁽⁶³⁾ たびたび独探関係記事に登場する。その本部に指揮された独探が満州へ侵入してくることを警戒していたのである。⁽⁶⁴⁾ 四月に日英がウラジオストクに海軍陸戦隊を上陸させると、日本は東部シベリアを占領しようとしていると独探が噂を流し日露間を争わせようとしていると警鐘を鳴らす記事や、⁽⁶⁵⁾ いわゆるシベリア出兵が間近となった七月にはチェコ軍がイルクーツクやウラジオストクで独探を警戒しているとの記事も見られる。⁽⁶⁶⁾ このように一九一八年に入ると日本の対口政策動向を背景にした独探記事が中心になっていた。しかし『神戸』にみられたようなロシア系独探が満州を超えて日本に入ってくる可能性や在日ロシア人が独探として活動する可能性に関する警戒感⁽⁶⁷⁾は『東朝』にはみられない。地元警察の外事課が独探を警戒している様子を積極的に報じる『神戸』に対して、『東朝』では国際ニュースの中に独探が登場し、情報源も海外特派員や海外の新聞社・通信社であるため、独探に対する距離感が遠くなりがちであった。地域における独探やロシアの独探に関する報道において、『神戸』との報道姿勢の差異が分かりやすく出たといえよう。

おわりに

本稿では『東朝』における独探関係記事の整理と分類を行った。『神戸』と比べると、『東朝』には地元に出没する独探ニュースに乏しく、海外の独探記事の方が充実している。戦争初期にスキャンダラスな地元の独探事件を経験した『神戸』読者に比べると、独探は遠くの出来事として『東朝』読者に受容された可能性は高い。しかし、その豊富な海外情報によってスパイ行為の内容が具体的に見えてくる。つまり海運や各種生産施設への破壊工作、連合国間の不和を狙ったプロパガンダ活動、被支配民族の反乱支援などである。『神戸』でもそれはうかがえたが、海外の独探報道が多い『東朝』ではそれが顕著である。イギリスのケイスメント事件、フランスのボロー事件、アメリカのボイド事件のように実際に独探行為が発覚し処罰された事件は摘発された「独探」に実態があったかどうかはともかくとして、認識上はスパイの存在が現実であることを読者に印象づけただろう。ただの一次的なパニック症状で終わった露探騒動に比べて、戦時において備えるべき脅威として様々な例を「独探」は示したのである。

また日本人の「独探」に対するスタンスを示す記事を一つ紹介したい。一九一八年七月、東部戦線の兵を西部に廻して行ったドイツの春季攻勢が失敗に終わろうとしているころの、『東朝』の投書記事である。⁽⁶⁷⁾華族を含む一〇名ほどのドイツ洋行経験のある医者を集まり「独逸の夕」は開戦以来中止になっていたが、六月末に東京在住のドイツ人を招待して、ドイツ語で話し、ドイツの歌や踊り、ドイツ式宴会を派手に行ったことを、投書は非難している。「欧州線上に於ける我連盟国は最後の血の一滴をも絞り尽くさんとして危うい戦い」をしている時に、「困った名士や華族様ではないか」、ある「外字新聞は二段抜きで皮肉に報道した」と嘆く。この投書によると、この会は「独探と間違われまいよう」に「前以て然る可き筋の意向を」確認したうえで開催されたそうであ

る。事前に参加者が当局に開催の可否を確認していることから分かるように、独探と見做されることを恐れる気持ちがある存在していた。そして、それが実際日本社会において批判の対象だったことを、この記事は示している。新型コロナウイルスが流行し、ロックダウンや外出自粛が行われている最中にノーマスクで宴会を開いた者に対して行われた批判と似たようなニュアンスかもしれない。独探を忌む気持ちが社会に存在しており、ひいては大戦に対する関心が継続していたことをも意味する。

独探問題は、流言と大衆心理、政府の流言対策、戦時の情報戦、プロパガンダ、在留敵国人問題など発展的なテーマに繋がる多様な側面と可能性を有している。引き続き基礎的な整理を継続することが必要である。

繰り返しになるが、本稿で行った整理や分析は「キーワード検索を基にした限りでは」という留保付きの暫定的なものである。偏ることなく無作為に記事が検索から漏れている場合は、全体の傾向として本稿の整理はある程度有効性を保ちうるが、そうでない場合は本稿の妥当性は大きく低下する。対象期間の紙面を実際に調査し改訂を行いたい。

- (1) スパイ・フィーバーに関しては差し当たり Bischoff, Sebastian: *Spy Fever 1914*, in: 1914-1918-online. International Encyclopedia of the First World War, ed. by Ute Daniel, Peter Gatrell, Oliver Janz, Heather Jones, Jennifer Keene, Alan Kramer, and Bill Nasson, issued by Freie Universität Berlin, Berlin 2019-03-25. DOI: 10.15463/ie1418.11355, とその参考文献。

- (2) 奥武則『ロシアのスパイ―日露戦争期の「露探」』(中公文庫、二〇一一年)二四八―二五一頁。本書は『露探―日露戦争期のメディアと国民意識』(中央公論新社、二〇〇七年)の再刊であり、若干の補筆が加えられている。ほかに露探を扱った研究としては牧原憲夫「覚書 1907年「露探」刺殺事件」(『東京経済大学人文自然科学論集』

- 第一一六号、二〇〇三年）、藤野裕子「日露講和問題をめぐる政治運動と民衆の動向―日比谷焼打事件再考にむけて」『民衆史研究』第六六号、二〇〇三年十一月。吉村道男「増補 日本とロシア」(日本経済評論社、一九九一年)、吉村道男「露探と日本社会」(『歴史読本』第四九巻第四号、二〇〇四年四月)。
- (3) 新保邦寛「独探」を読む―(谷崎もの)という形式―(『稿本近代文学』第二一集一九九六年一月)。風巻景次郎、吉田精二編『谷崎潤一郎の文学』(塙書房、一九五四年)三五―三五二頁。中村光夫「谷崎潤一郎論」(新潮社、一九五六年)一三三―一三八頁。千葉俊二「解説 彼方への憧れ」(『潤一郎ラビリンズ6 異国綺談』中央公論社、一九九八年)三〇九―三一九頁。野崎敏「フランス語入門―「独探」」(『谷崎潤一郎と異国の言語』人文書院、二〇〇三年)一五一―四八頁、二〇一五年に中公文庫として再刊。
- (4) 福岡大祐「追放された「スパイ」―第一次世界大戦における独塊人強制追放と谷崎潤一郎「独探」」(20世紀メデア研究所『Intelligence』第一六号、二〇一六年三月)。
- (5) 『神戸新聞』に現れた独探報道については近く公刊予定の別稿にて扱っており、本稿で言及する『神戸』に関することはそちらに依拠している。
- (6) 「塊探」はオーストリアの軍事探偵を指す。他にも袁世凱のスパイを指す「袁探」や、逆に日本のスパイを指す「日探」などの言葉もマスメディア上で使われている。
- (7) 「独探の支人取調」『東朝』一九一四年九月一日。煩雑を避けるため、以下の注釈では『東朝』の標記を省略する。新聞記事の明記が無い記事は全て「東朝」の記事である。
- (8) 「我が軍に捕はれし独探の支那人」一九一四年一〇月一日。
- (9) 美土路特派員(二〇月二日発、陸軍省検閲済)「油断ならぬ支那人独探▽我が〇〇〇を狙撃」一〇月一三日。
- (10) 「膠州湾攻囲▲攻囲戦現況▽不埒なる支那人独探」一〇月一三日。独探支那人に関する記事は他に…「独探捕へらる」一九一四年九月九日、「膠州湾攻囲▲独探十名捕縛」一九一四年一〇月一七日、「膠州湾攻囲▲独探の横行▽日本商人侮辱さる」一九一四年一〇月二日、「支那の新提議▽独探の処分方」一九一四年一〇月二三日。
- (11) 「独探の嫌疑を受けし予備大尉▽憲兵隊の取調」一九一四年九月一〇日。
- (12) 「怪しき外人の動静▲次も独探嫌疑者」一九一四年九月一日、「独探の嫌疑者▽日独人の混血児」一九一四年九月

二日。横浜を含めても、三二日に横浜に入港したマンチュリア号には独探嫌疑の外人七名が乗船との噂があり、水上署は刑事と通訳が乗り込み取調べをしたが要領を得ず、私服巡査をつけて監視することになったことを伝える記事しかない(「怪しき外人の動静▲マ号の独探捜査」一九一四年九月一日)。

(13) 粟屋憲太郎、中園裕編『国際検察局押収重要文書 ③ 内務省新聞記事差止資料集成 第一巻』(日本図書センター、一九九六年) 六九一七〇頁所収。

(14) 「内地で活躍せる独探は羅馬尼人が多い」宣教師も音楽家も怪しい◇意想外の暗号電報」一九一八年一月二八日。

(15) 横浜からの退去として「独探行為の一斑▽五外人の性行」一九一五年二月一七日、「独探苦肉の策▽英人ポール退去▽替玉を使ひ損ふ」一九一五年二月二六日、「居残り独探退去▽昨夜中米船に乗る」一九一五年二月二八日、「独探に退去命令 米水兵を煽てて問題を起す」一九一六年八月一四日。長崎からのものとして「長崎の二独探▽退去を命ぜらる」一九一五年一月二九日、「独探退去す」一九一五年二月三日。東京からの退去では「帝都に在りし三名の独探▽昨日退去を命ず」一九一五年三月一六日があり、この三名の中の一人が谷崎『独探』の題材になったオーストリア人シャッツ・マイヤーである。

(16) 「怪しき外人の動静▲次も独探嫌疑者」一九一四年九月一日、「独探の嫌疑者▽日独人の混血児」一九一四年九月二日、「独探か▽煙突の上から砲兵工廠撮影」一九一六年三月二九日。

(17) 「独探に退去命令 米水兵を煽てて問題を起す」一九一六年八月一四日、「支那留学生と独探▽支那号の船内捜査」一九一六年九月一五日。

(18) 「時計塔中の独探▽指針を動かし連類に信号」一九一四年一〇月一日、「独探の暗号牝牛の図」一九一四年一〇月八日。

(19) 「独逸立開団編成▽アルサス独探充滿」一九一六年八月九日はこの典型である。また「婦人独探死刑」一九一四年一〇月二七日では場所について「北フランス」とだけあるが占領地ではないかと思われる。

(20) 「仏国内務卿辞職▽独探事件嫌疑の為めか」一九一七年九月三日、「仏内閣の危機▽内相辞職の結果」一九一七年九月九日、社説「仏蘭西の政局(新内閣漸く成立)」一九一七年九月一六日、「仏国社会党大会▽政不信任案可決」一九一七年一〇月一〇日、「仏国内閣改造勧告」一九一七年一〇月二〇日、「仏国内閣瓦解▽主因は内政問題」一九一七

- 年一月一六日、「仏首相独探事件調査」一九一七年一月二日、「仏国独探事件拡大▽カイヨー等起訴されん」一九一七年二月一四日、「仏国社会党の宣言▽司法公正の希望」一九一八年二月二〇日、「仏上院独探事件審問」一九一八年一月二四日、「社会党デ將軍避難▽政府信任固し」一九一八年二月一日。
- (21) ミシエル・ヴィノック著、大嶋厚訳『クレマンソー』（作品社、二〇一三年）四五四頁。
- (22) 前掲ヴィノック『クレマンソー』四六五頁。
- (23) 「社会党デ將軍避難▽政府信任固し」（一九一八年一月二四日）。
- (24) 「独逸外交団の陰謀」一九一七年一月九日、「独探ボロ・パシヤ」一九一七年一月一〇日、「巴里独探審問開始」一九一八年二月七日、「別報」一九一八年二月七日、「独探ボロパシヤ死刑」一九一八年二月一七日、「ボロ」死刑に歓呼」一九一八年二月一九日、「独探ボロの裁判」一九一八年二月二〇日、「独探問題討議」一九一八年二月二六日、「ボロ」死刑延期」一九一八年四月一日、「ボロ」死刑執行」一九一八年四月一九日、「独探ボロ」銃殺」一九一八年四月二二日。
- (25) 「ジュルナル紙前社長拘引▽独探ボロ」事件に関与」一九一八年二月二一日。
- (26) 「独探女優の銃殺◇巴里にて捕はれし舞踏家」一九一七年一月一八日。
- (27) 外務省の資料にもボロやマルヴィーの事件記録が残されており、関心を集めた事件だったことがうかがえる。「ボロ」事件 「マルヴィー」対「ドーデ」事件附 J A C A R (アジア歴史資料センター) Ref: B08090125600、欧州戦争関係書類仮綴／仏国独探事件(外務省外交史料館)。
- (28) カナダについては反乱・分離工作よりも、オタワの国会議事堂や軍需品工場に対する破壊工作や無線による情報収集や船舶に対する攻撃といったタイプがみられ、アメリカの独探記事と類似の傾向がある。「加奈陀の独探」一九一四年一月八日、「議會椿事と其原因▽爆弾を用ひし独探の放火」一九一六年二月七日、「独探軍需品会社を焼く」一九一六年二月七日、「加奈陀船舶出入厳戒▽横浜貨客検査係特設」一九一七年八月三日。
- (29) 「独塊探数百名捕縛」一九一四年一月二四日。
- (30) 「英艦沈没は独探」一九一四年一月二九日、「英艦爆沈原因調査」一九一四年一月三〇日。
- (31) 「シ博士嫌疑暗る」一九一五年一月二八日。

- (32) 「大戦争と英国▽六戸通信管理局長談」一九一五年一月一日、「彼も独探是も独探▽神経の昂つた英人」一九一五年一月二六日、「太刀献上記 九 出発迄のどさくさ 楚人冠」一九一五年四月二八日、「バタの臭(五) 無名氏」一九一七年一月六日。
- (33) 「豪州独探跋扈▽盛に過激分子を煽動す」一九一八年五月三日。
- (34) 「軍艦二隻急派▽新嘉坡暴動」一九一五年二月九日。
- (35) 「印度動乱なし▽革党蠢動は事実」一九一五年一月一日。
- (36) 「印度不穏重大」一九一八年三月二三日。ほかに「印度の形勢」一九一八年八月二三日など。
- (37) シンガポールにおけるインド人兵士反乱やインド独立運動とドイツの関与については差し当たり、Don K. Dignan, "The Hindu Conspiracy in Anglo-American Relations during World War I," *Pacific Historical Review* 40-1 (Feb. 1971): 57-76. Giles T. Brown, "The Hindu Conspiracy, 1914-1917," *Pacific Historical Review* 17-3 (Aug. 1948): 299-310. Heather Streets-Salter, "The Local Was Global: The Singapore Mutiny of 1915," *Journal of World History* 24-3 (Sept. 2013): 539-576. Joan M. Jensen, "The 'Hindu Conspiracy': A Reassessment," *Pacific Historical Review* 48-1 (Feb. 1979): 65-83. Karen A. Snow, "Russia and the 1915 Indian mutiny in Singapore," *South East Asia Research* 5-3 (Nov. 1997): 295-315. Karl Hoover, "The Hindu Conspiracy in California, 1913-1918," *German Studies Review* 8-2 (May, 1985): 245-261. Leon Comber, "The Singapore Mutiny (1915) and the Genesis of Political Intelligence in Singapore," *Intelligence and National Security* 24-4 (Aug. 2009): 529-541. Matthew Erin Plowman, "Irish Republicans and the Indo-German Conspiracy of World War I," *New Hibernia Review/Iris Éireannach Nua* 7-3 (Autumn, 2003): 80-105. Sho Kuwajima, "Indian Mutiny in Singapore, 1915: People Who Observed the Scene and People Who Heard the News," *New Zealand Journal of Asian Studies* 11-1 (June, 2009): 375-84. Tan Tai-Yong, "An Imperial Home-Front-Punjab and the First World War," *The Journal of Military History* 64-2 (April, 2000): 371-410. Tim Harper, "Singapore, 1915, and the Birth of the Asian Underground," *Modern Asian Studies* 47-6 (2013): 1782-1811. Singh, Sunit; Ghadar Conspiracy, in: 1914-1918-online. International Encyclopedia of the First World War. ed. by Ute Daniel, Peter Gatrell, Oliver Janz, Heather Jones, Jennifer Keene, Alan Kramer, and Bill

- Nasson, issued by Freie Universität Berlin, Berlin 2015-10-29. DOI: 10.15463/ie1418.10753. 大山梓「新嘉坡暴動（一九一五年二月）」と領事報告」『政経論叢』三九卷一・二号、一九七一年三月）七三―八八頁、桑島昭「第一次世界大戦とアジア―シンガポールにおけるインド兵の反乱（1915）」『大阪外国語大学学報』六九号、一九八五年）二二―四八頁。
- (38) 「独艦愛蘭に沈没」一九一六年四月二六日、「愛蘭の暴動▽根柢浅からず」一九一六年四月二七日、「独探公判開始さる▽独探の売国演説摘発」一九一六年五月一七日、「独探公判開始さる▽独探の売国演説摘発」一九一六年五月一八日、「独探公判光景」一九一六年五月一八日。
- ケイスメントについては主に、「JapanKnowledge Lib から岩波世界人名大辞典の記述と Kerry County museum の HP : <http://kerrymuseum.ie/> か <http://kerrymuseum.ie/museum/wp-content/uploads/2020/03/Casement-in-Kerry-A-Revolutionary-Journey.pdf> を参照した（閲覧日二〇一三年十一月二三日）。
- (39) 例えば「愛蘭反乱陰謀」一九一八年五月二三日、「連合側事情▲愛蘭陰謀陳述書」一九一八年五月二八日。
- (40) 社説「英国の内憂（独逸煽動の暴動）」一九一六年四月二八日。
- (41) 早いものだと「放火独探拘引」（一九一五年四月三日）はニューヨークからル・アープルに向かう仏国汽船が洋上で火災を起こし、容疑者は米国旅券持ちの独探嫌疑者であることを伝えている。
- (42) 「在米独探の大胆」一九一五年二月七日。
- (43) 「独探の爆発を免れし春洋丸 独探嫌疑者乗船」一九一五年二月八日。
- (44) 「在米独探の策源地▽前奥国領事の口禍」一九一五年一月一五日。
- (45) 「在米独探の裁判」一九一五年一月二六日、「独探公判内容」一九一五年一月二七日、「漢米汽船支店長有罪」一九一五年二月五日。「漢米汽船役員宣告」一九一五年二月七日。
- (46) 一番最後のものが「在米独探密計暴露」一九一八年一〇月二三日は前駐米ドイツ大使ベルンストルフが連合国への軍需品製造・輸送を妨害する種々の工作を行っていたとする米政府の発表を伝えている。
- (47) 例えば「独探の陰謀露顕▽軍需品移出を阻止せんとす」一九一七年七月五日。
- (48) 例えばコロラドの炭鉱で金銭を散布しストを繰り返した罪で独探が逮捕されたことを伝える「独探逮捕さ

- る」一九一七年七月九日。
- (49) 「独探続々逮捕」一九一七年四月一〇日。
- (50) 「膏薬に病菌を塗布して▽悪病伝染を企てた独探」一九一七年七月二二日。
- (51) 「全米に排日活動写真▽独探の仕業」一九一七年三月三一日。
- (52) 社説「日米交渉如何(経済的接近)」一九一七年九月二九日。このほかに独探による日米離間を指摘する記事として「独探日米離間確証▽森山少将談」一九一七年四月一五日、「独探の歓迎妨害」一九一七年五月一六日。前者は一九一四年一月に軍艦出雲がメキシコを訪れた際、森山艦長がヴィラと会見し「米国は日墨共通の敵なり」と語ったという記事は独探が故意に作成流布した日米離間策であり、米国人が易々とこれに惑わされるのは遺憾だ、という森山少将本人の談。後者は日本練習艦隊がサンフランシスコに入港に際して、独探が日本艦隊歓迎を妨害し、米国に悪感情を引き起こそうとしていることを米当局が発見し、この事件の調査を開始したと報じる記事である。
- (53) 「独探嫌疑者拘引」一九一五年二月一日、「物騒なる浦潮」一九一五年七月一五日、「浦潮の大火は独探に非ず▽労働者の過失」一九一六年五月二八日。
- (54) 「露国独探処刑」一九一五年四月五日、「独探処刑別報」一九一五年四月五日、「独探連累者逮捕」一九一五年四月六日、「露国陸相夫人の秘密 独探大佐との関係 先夫を陥れた妖婦」一九一五年四月二六日、革命勃発後もスホムリノフ独探事件は続報が掲載される「前大臣等運命不明」一九一七年三月一八日、「スホムリノフの公判」一九一七年八月二八日、「東人西人」一九一七年九月三〇日。
- (55) 「露国の革命▽驚く可き売国行為」一九一七年四月三日。これと同様の記事が『神戸』にも掲載されている。ほかにも「白羽の矢は孰の姫君に立つか◇英国皇太子妃殿下の候補者調べ」一九一七年四月二七日。
- (56) 「政府の危機去る」一九一七年五月九日、「独探の扇動と判明」一九一七年五月九日、「革命後の露国▲独探の軍隊扇動」一九一七年五月一五日。
- (57) 革命の展開については池田嘉郎『ロシア革命 破局の8か月』(岩波書店、二〇一七年)を参照した。
- (58) 社説「講和提議と露国(此際多少の危惧)」一九一七年八月一九日。
- (59) 「勝田蔵相演説▽大阪経済会席上」一九一七年十一月一六日。ポリシエビキ(レーニン一派)を独探と見ている

- ことが分かる記事として「レニン独探の証拠」一九一七年八月一七日、「分離した芬蘭（下）露都特派員太田賛公」一九一七年九月五日、「市街戦の中から（上）露都特派員太田賛公」一九一七年九月七日、「東人西人」一九一七年一月一八日、「露国政界当面の人（八）長醒子・レーニン一味（下）」一九一七年二月一九年。「英国ケ氏渡米不許可」一九一八年一〇月二八日。
- (60) 「独探の平和運動」（一九一七年一月二五日）はロイター社発の情報として、駐ロ米国大使によれば「独逸の間諜は殆ど公然平和運動に奔走しつつあり」と述べる。
- (61) 「混乱中の露国▽宮川少将帰朝談」一九一七年一月一五日、「露都には空家が多い」一九一七年一〇月一五日。この記事に登場する三井物産社員山田耕作はフィンランドの独立も独探の活動の成果と信じられていると述べている。
- (62) 「独探局本部発見▽イルクーツクの全西伯利諜報局」一九一八年一月三日。
- (63) 独探の本拠として言及しているものとして「浦塩寛城子不安」一九一八年一月一〇日、「独探に武器供給▽西伯利過激派独探と結託」一九一八年二月一五日。
- (64) 前掲「浦塩寛城子不安」。満州への浸透を警戒したものとして「独探の一味か▽満鉄沿線の怪団体」一九一八年三月一三日、「満鉄附属地に独探徘徊▽奉天駅でも二俘虜逮捕」一九一八年三月一八日、「瑞西人独探嫌疑」一九一八年一〇月四日。
- (65) 「日本の真意を知らぬ浦潮の過激派▽有産階級は日本兵の上陸を喜んでいるのだが」一九一八年四月一日、「露政府の曲解▽日英陸戦隊上陸」一九一八年四月一八日。
- (66) 「浦潮独探の魂胆 火薬庫爆発の計画 フルバン氏浦潮混乱の其原因を語る」一九一八年七月三日、「子軍独探狩出」一九一八年七月六日。
- (67) 「鉄箒◇独逸の夕」一九一八年七月八日。